



TITLE:

# B. B.ベルビ - フレロフスキー論序説 (出口勇藏教授記念號)

AUTHOR(S):

松岡, 保

---

CITATION:

松岡, 保. B. B.ベルビ - フレロフスキー論序説 (出口勇藏教授記念號). 經濟論叢 1972, 109(1): 131-149

ISSUE DATE:

1972-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/133449>

RIGHT:

# 經濟論叢

第109卷 第1号

## 出口勇藏教授記念號

---

献 辞	大 野 英 二	
社会科学の「科学性」	河 野 健 二	1
貨幣価値をめぐるリカードとマルクス	行 沢 健 三	18
資本と分配の理論について	菱 山 泉	41
ルカーチとハンガリア・ソヴィエト共和国	平 井 俊 彦	64
W. バジョットのアダム・スミス論	岸 田 理	85
実質費用論と機会費用論	高 橋 正 立	108
B. B. ベルビーフレロフスキー論序説	松 岡 保	131
晩年のマルクス覚え書	田 中 真 晴	150

出口勇藏 教授 略歴・著作目録

---

昭和47年1月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## B. B. ベルビ－フレロフスキー論序説

松 岡 保

### I

『資本論』第1巻の刊行以後におけるマルクスのロシア研究については、近年、わが国においても、マルクスの「晩年におけるいっそうの世界史的視野の拡大の重要な一環」として、つとに注目をあびてきている。そして、すでに、マルクス——およびエンゲルス——の「ロシア論」の変遷や特徴が、「ロシア資本主義論史」との関係や、かれの「世界史像」や「後進国革命像」との関係からとりあげられ、論じられていることは、周知のとおりであり<sup>1)</sup>、その結果、さまざまな事実と論点が明らかにされてきた、といつてよい。

そのなかで、興味をひかれ、新たに関心をよびおこされる問題の一つに、晩年のマルクスにおける本格的なロシア研究の時期の問題をあげることが許されよう。奇しくもマルクスは、丁度、1860年代末から80年代初頭というロシアにおいてもきわめて画期的な時期、すなわち、ナロードニキ主義運動が本格化してゆく時期から、それが高揚を経て最後、挫折し、転換を余儀なくされていった時期に、しかも、それと直接、間接にかかわった人や著作を介して、かれの研究をおこなったのであった。一例をあげるなら、羊ば偶然的な要因もあるとはいえ、マルクスの本格的なロシア研究は、フレロフスキーの『ロシアにおける労働者階級の状態』(1869年)にはじまって、最後、ヴォロンツォフの『ロシアにおける資本主義の運命』(1882年)で終わっているものであり、この両者は、同時に、ロシアにおけるナロードニキ主義の運動と思想の歴史のうえで、おのお

1) 代表的なものとして、田中真晴「ロシア経済思想史の研究」昭和42年、山之内靖「マルクス・エンゲルスの世界史像」昭和44年、淡路憲治「マルクスの後進国革命像」昭和46年をあげることができる。

の重要な画期的意味をもつものにほかならなかった。

すなわち、前者は、はじめて「農奴解放」(1861年)後のロシア農村の姿を赤裸々にしめすことによって、ロシア社会に非常な衝撃をあたえ、「人民の中へ」の運動のバトスをひきおこして行った<sup>2)</sup>。しかもおなじ年、ラヴロフの「歴史書簡」、ミハイロフスキーの「進歩とはなにか」が発表されるのであり、70年代の運動の出発点となったこれらの刊行によって、1869年は、「古典的ナロードニキ主義のイデオロギーの出現」した時期と考えられている<sup>3)</sup>。そして、これに対して、マルクスの目にした最後のロシア文献となったヴォロンツォフの『ロシアにおける資本主義の運命』は、その70年代の運動が挫折した時期において、それまで支配的であったナロードニキ主義の「二つの道の可能性の思想」に終止符をうつものであり、ナロードニキ主義の——より広くはロシアにおける革命思想の——転換と再編成を象徴するものとなっている<sup>4)</sup>。丁度その間の10年余り、マルクスはロシアに非常な関心と興味をよせ、ロシアの本格的な研究をおこなったのであった。

このことは、もちろん、一方ではマルクスの側にさまざまな要因があったからであるが、同時に他方、ロシアの側からみても、見逃せぬいくつかの問題を含んでいるように、思われる。ことに、フレロフスキーの著書が、ロシアにおける70年代の運動とマルクスのロシア研究の、双方における出発点をなし、両者に強い刺激をあたえたという事実は、両者を媒介するものとして注目をひく。それゆえ、以下において、フレロフスキーの経歴を一瞥しながら、かれがロシアにおける運動やマルクスにたいして、どのような経過で、どうした関係をもったかをたどることによって、そこに含まれているいくつかの問題点や意義について明らかにしたい。

2) 和田春樹、「土地と自由」主義の革命理論、「歴史学研究」第241号、昭和35年5月、3ページ。

3) A. Walicki, *The Controversy over Capitalism*, 1969, pp. 26-27.

4) 田中真晴、前掲書、18-22ページ、および、松岡保、ナロードニキのロシア資本主義論、桑原武夫編「ブルジョワ革命の比較研究」昭和39年、595ページ。

## II

ところで、エヌ・フレロフスキー (Н. Флеровский) の名で発表された『ロシアにおける労働者階級の状態』(Положение рабочего класса в России) が、ヴァシリー・ヴァシリエヴィチ・ベルビ (Василий Васильевич Берви) の筆になるものであり、かれの実際の見聞をもとにしたものであることは、すでに知られていよう。かれは、1829年4月28日、モスクワの南東、中央農業地帯のリャザンで、イギリス系の出身でカザン大学の教授をしていた父のもとに生れた<sup>5)</sup>。生年からいえば、ラヴロフよりは6歳若いものの、チェルヌイシエフスキーよりは1歳若いだけであり、シュチャーポフよりは1歳年長といったところで、ほぼおなじ年代に属し、ゲルツェンやバクーニンといった世代につづく第2世代、いわゆる60年代人であることが、まず注目される。

1849年、カザン大学法学部を卒業した後、法務省に奉職したが、かれの望みは大学で財政法を講じることであったと、いわれている<sup>6)</sup>。チェルヌイシエフスキーも講壇への希望をもっていたことから考えあわせると、当時はなお大学で講じることが、かれらをひきつけた時代であったのであろうか。それでいて、フレロフスキーもまた、その「思想的堅固さ」を疑われて、大学への道を閉じられ、流刑への道を歩むのである。

すなわち、かれは、1861年、学生の逮捕に抗議した署名あつめに積極的役割りを果たしたということで、当局の注意をあびることとなった<sup>7)</sup>。この年、集会と授業料免除を制限しようとする政府の規制がきっかけとなって、ペテルブルク大学では9月22日に大学側の教室閉鎖、翌23日抗議学生のロシアの首都にお

5) かれの生涯については、O. B. Алтекман, *Василий Васильевич Берви-Флеровский по материалам б. III-го отделения и Д. Г. П.*, 1925 および, E. И. Берви, *Из моих воспоминаний, Голос Минувшего*, No 5-9, 1915, が基本文献のようであるが、いずれも未見であり、以下の叙述は、F. Venturi, *Roots of Revolution*, 1960; *История русской экономической мысли*, т. II ч. 1, 1959, および, B. B. Берви-Флеровский, *Избранные экономические произведения в двух томах*, том 1. 1958 による。

6) F. Venturi, *op. cit.* p. 487.

7) *Ibid.*

ける最初のデモ、それにつづく学生の逮捕と大学閉鎖といった形で、学生運動がもえあがり、モスクワその他に波及して、ところによっては1863年まで、学生運動と大学閉鎖はつづくのである<sup>8)</sup>。フレロフスキーにたいする当局の注意は、このときの騒動と大量の組織的逮捕に関連して生じたわけであるが、ほかに、ラヴローフとウーチン(Н. И. Утин)もこれに関係していることは興味ぶかい。のち「歴史書簡」をあらわすラヴローフは、当時その主観的観念論をチェルヌィシエフスキーに批判されてはいたが、砲兵学校の教官という地位にありながら、学生と軍隊の衝突を防ぐべく苦心し、砲兵将校を学生集会に参加させたりしていた。また、学生の「自由大学」は、当局の禁止によって実現はしなかったが、チェルヌィシエフスキーとラヴローフを講師として招こうとしたのであった<sup>9)</sup>。

さらに、その学生運動を指導した秘密の委員会のメンバーの一人であったのが、その後まもなく第1次「土地と自由」結社の活動家となり、のち、第1インター・ロシア支部設立の発起人ともなるウーチンであった。相似た道をたどるアレクサンドル・セルノーソロヴィエビッチともども、当時20歳すぎのかれらは、この学生運動から姿を表してくるのである<sup>10)</sup>。その意味で、1861年におこった学生運動は、ラヴローフ、フレロフスキーの年代と、10歳前後若い次の年代とをむすびつけているのであるが、くわえてそれを支援してオガリョーフが、「人民の中へ」とのよびかけを発したことも、想起されよう。「大学など閉めさせよ」「自由人たるには、人民の中にゆくことが必要だ」という「カラコール」紙上のことばは、10数年後、ラヴローフやフレロフスキーを介して、大挙実現してゆくこととなる。それゆえ、マルクスの関心をもった70年代のロシアとフレロフスキーをつなぐ伏線は、一つにはここにあったと考えたい。

けれども、フレロフスキーの逮捕、流刑をもたらしたのは、この学生運動が直接にはない。それは、『ロシアにおける労働者階級』の著者にふさわしく、

8) Cf. *ibid.*, pp. 220-231.

9) *Ibid.*, 228 9.

10) *Ibid.*, pp. 227, 277.

農奴解放をめぐる事件であった。このおなじ年、「解放令」に抗して——というよりはある意味では依拠して——即時解放を主張した農民たちが、軍隊によって鎮圧、虐殺されたベズドナ事件があり、学生たちのおこなったその慰霊祭の席上、カザン神学校教授の職にあったシュチャーポフが農民への同情と民主的憲法の必要性を口にしたため、逮捕、罷免されるという事件がおこった<sup>11)</sup>。

「わたくしはなんらあなた方よりすぐれていない。わたくしも農民の出である」という農民との一体感に支えられた、シュチャーポフのこの行為が、誠実な、しかし非政治的な、個人的決意にもとづくものであるとすれば、フレロフスキーのそれは、ロシアの貴族インテリゲンツィアにみられる統治の責任感、為政者の責務といったものにもとづくという点では対極的な、しかしナロードニキ主義に流れる自己犠牲の源流を思わせる行為であった。というのは、フレロフスキーがかかわったのは、「解放令」にたいする農民自体の反抗ではなく、トヴェーリ県の貴族を中心とする貴族たちの抗議事件だったからである。

すなわち、これまた有名な事件であるが、1862年早々、トヴェーリ県の貴族を中心とする112名の貴族は、農奴解放の遅延を批判し、司法の独立、代議集会などをもとめた請願書をアレクサンドル二世に送り、不服従を主張したために、首謀者13名が逮捕されるという事件があった<sup>12)</sup>。「解放令以後に貴族によっておこなわれた唯一の公然たる自由主義的動き」といわれるこの事件に、バクーニンの兄たちも参加しているのであるが、主謀者逮捕の報せを聞いたフレロフスキーは、「個人的抗議」をおこなうことを決意し、アレクサンドル二世とイギリス大使館に、長文の手紙を送ったのである。そして、そのなかで、学生や立派な貴族にたいするアレクサンドル二世のそうした方策が革命運動を強めているのであり、そうした処置は「激昂にかられて対処する危険なゲーム」であると断じたという<sup>13)</sup>。

この行為と文面に接して、時の第3部長官ドルゴルーコフは、「ベルビの精

11) *Ibid.*, pp. 199-200.

12) 菊池昌典「ロシア農奴解放の研究」昭和36年、438-439ページ。

13) F. Venturi, *op. cit.*, pp. 487-488.

神状態を知らせるよう」に命じ、かれは、そのため、6カ月間、精神病院での検査を強いられた。精神異常あつかいは、チャダーエフの「哲学書簡」らしい、時々おこる事件とはいえ、フレロフスキーの「個人的抗議」が、かなり思い切った、常識的には考えられないものであったことをものがたるものであり、そのことは、かれの性格をもしめしていよう。そこには60年代人にしばしばみられる非政治的、非組織の性格がうかがわれるのであり、その意味ではシュチャーポフと共通するものがあると、いってよい。

それはともかく、この事件のために、フレロフスキーは法務省を追われ、1863年に、アストラハンに流刑に処せられたのである。さらに、そこで、他の流刑者と連絡をとり、農民にたいして土地をあたえるべきことを宣伝したかどで、ふたたび逮捕され、カザンに送られて取り調べをうけた。幸い、証拠はあがらなかったけれども、1864年にはシベリアに送られることになり、当初はクズネツクに、翌年にはトムスクへとという結果になった。1866年になって、ヨーロッパ・ロシアに戻ることができるようになり、ヴォログダ、ついでトヴェーリに移ったが、その後1870年、ようやく、ペテルブルク以外に居住することを条件に、釈放されたのであった<sup>14)</sup>。

こうして、約8年間、各地を転々としたその間の見聞をもとに、1869年に『ロシアにおける労働者階級の状態』が出版された。未だ釈放前のことであり、フレロフスキーというペン・ネームが用いられたのも、当然であろう。出版にいたるいきさつは、必ずしも明らかでないけれども、出版者となったのは、当時すでに『資本論』のロシア語訳の出版計画を引きうけていたポリャーコフ(Н. П. Поляков)であった。革命家たちと接触をもち、かれらを援助していたといわれるポリャーコフであるから、決して不思議ではないものの、単なる偶然の一致ではなかったであろう。たとえば、『資本論』のロシア語訳の計画者の一人、ゲルマン・ロバーチン(Г. А. Лопатин)は、すでに1867年、「人民」との接触をはかるべく、農村の巡礼をめざした「ルーブリの会」をつくってい

14) *Ibid.*, p. 488; *История русской экономической мысли*, т. II, ч. 1, стр. 310.



たが、その宣伝活動用の意をこめてフジャーコフの『古いロシア』を印刷するといったことを行なっており<sup>15)</sup>、かれにつながる線から、フレロフスキーの書物はポリャーコフのところにもちこまれたと、想像することもできそうである。ともあれ、本書の出版は、ロシアの青年に非常な衝撃をあたえるとともに、後述するように、ダニエリソンの手を経てマルクスに送られ、以後、マルクスの目をロシアにひきつける上にも、大きな役割を果たすこととなる。

もっとも、本書のもつ意味に注目したのは、ロシアの青年やマルクスだけではなかった。合法的出版物であり、まじめな科学的なものであることを認めながらではあったけれども、当時の官房第3部も、また、行間にみられる「社会主義的理念」を感知し、著者をさぐって、これがベルビであることをつきとめ、以後、かれにたいする監視を強化した。そして、1871年、著者名を伏せたまま出版された『社会科学入門』(Азбука социальных наук)は、これまた当時の青年たちには高く評価されたけれども、官房第3部によって、同年4月にモスクワに設立された第1インターナショナルのロシア支部による出版で、著者はベルビであるとの報告がアレクサンドル二世におくられ、かれの命令によって本書の販売は禁止される<sup>16)</sup>。「モスクワに設立の第1インター・ロシア支部」云々は誤解であって、かれの書物はチャイコフスキー団の「書物による運動」の一環として出版されたのであるが、チャイコフスキー団の活動と、前年3月のジュネーヴにおける第1インター・ロシア支部の設立とが結びつけられたのかもしれない。事実、この頃、かれと革命組織との接触は深まってゆく。

すなわち、この年、新たに国外で雑誌を刊行することを、チャイコフスキー団が考慮したさい、かれは、チェルヌィシエフスキーやミハイロフスキーとともに、その編集者の候補に挙げられたということであり、このことは、当時、かれによせられていた青年たちの信望をものがある。もっとも、この話は、かれの「変った性格」がそうした地位に合わないということで見送られたという

15) *Ibid.*, pp. 354-356.

16) *Ibid.*, p. 494; Там же, стр. 317-318.

ことであり<sup>17)</sup>、フレロフスキーが組織の指導者としては不向きであったことをも裏づけている。1862年の逮捕、流刑の原因からいっても、また、後の亡命後の著述生活からいっても、そのことは首肯できよう。そのために、かれのチャイコフスキー団への協力は、団の「書物による運動」のために、さらに一書をあらわすという形でおこなわれた。

つづいて、かれは、チャイコフスキー団とならんで「人民の中へ」の運動の担い手となつたいま一つの組織、ドルグーシン団と関係をもった。そして、その関係と影響はより深いものであったといわれているが、事実、ドルグーシン団が、1873年、モスクワで最初に秘密に出版したものの一つは、かれの手になるパンフレットであり、その内容も、「人民の中へ」をよびかけたものにほかならなかった。「わたくしは平等の宗教を創ろうと欲した」と、かれは書いているが、「自然の法則」にしたがえば、「万人は平等である」という真理、その真理を告げるべく「人民の中へ」行くことを、かれはよびかけたのであり、そのよびかけは、丁度70年代の「人民の中へ」の運動の開始と時をおなじくするものであった<sup>18)</sup>。1861年に「カラコール」紙上にあらわれた「人民の中へ」のスローガンは、ここに、新しい世代によって現実化されるわけであり、その両者をつなぐ役割りを、フレロフスキーはになったこととなる。その意味で、1861年から73年は、フレロフスキーにとってもっとも重要な時期といえよう。

これに較べて、以後のナロードニキ主義運動とかれとの関係や影響は、きわめてうすかったようである。ドルグーシンが1873年9月に逮捕された後、かれもまた逮捕、取り調べをうけ、1891年まで、アルハンゲリリスクとコストロームに流された<sup>19)</sup>。一つにはそのため、かれと70年代の以後の運動との関係が絶たれてしまったのであろうが、同時に、その間、両者の関心もすれちがって行ったのであろうか。80年代の初めまで、『祖国雑記』等に、かれはなお匿名で、土地問題についていくつか書いてはいるけれども<sup>20)</sup>、それらは、もはや、かつ

17) *Ibid.*, p. 486.

18) *Ibid.*, p. 498; *Там же*, стр. 318; *Изб. экон. произ.* т. 1, стр. 5-6.

19) *Ibid.*, p. 495; *Там же*.

ての『労働者階級の状態』のような衝撃や注目をもたらした跡はない。そして、1893年、ロンドンに移ることのできたフロフスキーが、そこで力をそそいだのは、『社会科学入門』の改訂と完成であった。結局3巻を出して、なお未完に終わったというこの改訂に、やっと国外で自由をえた、60歳をこえたかれがとりくんだということは、この書物にたいするかれの愛着をしのばせるものがあるけれども、さりとて、その内容については、高い評価があたえられたわけでもなさそうである<sup>21)</sup>。

その後、1896年、かれはロシアに戻り、長寿を全うする。かれが死んだのは、10月革命後約1年あとの1918年10月4日であって、時に89歳、かれが大戦や革命をどのような思いでうけとめたかは、興味をひくものがあるけれども、未だ明らかではない。いずれにせよ、『ロシアにおける労働者階級の状態』による農奴解放後のロシア農村の現実の提示と、そのもたらした衝撃こそ、それにつづく数年のかれの活動とともに、かれがロシアの思想と運動にあたえた最大のものであり、その後は両者、相交することはすくなかったといってよからう。そこに、おなじく「古典的ナロードニキ主義とイデオロギー」の形成に資しつつも、より長く、持続的に関係しつづけるラヴロフやミハイロフスキーとの差も認められるのである。

### III

つぎに、問題となるのは、マルクスのフロフスキーの著書との関係であるが、それは、すでにふれたように、『資本論』のロシア語訳者の一人、ダニエリソンを介してであった。周知のように、1868年10月初め、マルクスは、『資本論』のロシア語訳の出版を希望するダニエリソンとリュエバーヴィンからの有名な手紙<sup>22)</sup>をうけとっている。この手紙が、マルクスにとって、うれしい、

20) См. *Ист. русс. экон. мысли*. т. II, ч. 1. стр. 512-513.

21) F. Venturi, *op. cit.*, p. 495.

22) К. Маркс, Ф. Энгельс и революционная Россия, 1967——以下ではたんに *Рев. Россия* と省略——стр. 158-159.

しかし、全く予想外のものであったこと、この手紙以後、マルクスのロシアへの関心と、ロシアの関係者との交流が急速にすすむことは、これまた、よく知られているけれども、そのなかでも、フレロフスキーの著書は、いち早くマルクスの手許に届けられ、マルクスの関心を加速するのに、大きな役割りを果たしていることが注目されるべきである。

すなわち、いま、その間の経過をたどれば、さきのダニエリソンの手紙のあと、マルクスは、ジュネーヴのアレクサンドル・メルノー・ソロヴィエヴィチからも、新聞「エガリテ」への寄稿を依頼する手紙を受けとった。1868年11月20日付のその手紙<sup>23)</sup>は、直接には、ダニエリソンの件ともフレロフスキーの著書とも関係はないが、さりとて、全く無縁なものでもなく、マルクスとロシアの革命家との接触という新しい動きの一つであった。アレクサンドルの兄ニコライは、60年代初頭の代表的ナロードニキ組織、第1次「土地と自由」結社の創始者の一人であり、チェルヌシシェフスキーとともに逮捕されて、1866年にシベリアで倒れたが、弟のアレクサンドルも、1861年の学生運動に、丁度その世代として参加した後、やはり「土地と自由」結社のメンバーとなり、尊敬と信頼を集めた1人であって、60年代初頭の運動の生きのこりにほかならない<sup>24)</sup>。たまたま、国外にいて逮捕をまぬがれ、以後、スイスで亡命生活を送るのであるが、「新しい世代がインスピレーションをえたのは、あなたからでなくチェルヌシシェフスキーからだ」とのべたかれは、ゲルツェンへの批判と絶縁という方向をとった。このことは、そのままかれと第1インターとの一致を意味するものではなかったが、労働運動においてバクーニン派の「同盟」と対立したなかで、マルクスに接近してきた動きが、1868年11月のさきの手紙であったのである<sup>25)</sup>。マルクスも、前年の12月にベッカーを通じて『資本論』を贈っており<sup>26)</sup>、かれについては聞いていたとみてよからう。

23) Там же, стр. 161-165.

24) ユルノー・ソロヴィエヴィチ兄弟については、F. Venturi, *op. cit.*, pp. 254-267, 276-284 を参照。

25) *Ibid.*, p. 283.

26) *Рев. Россия*, стр. 165.

このとき、アレクサンドルの希望は実現しなかったし、かれ自身、翌1869年11月には、バクーニン派によって「エガリテ」の編集部を追われ、夏には死への道をえらんでいる。けれども、そこには、ゲルツェンやバクーニンといった、かつての、そしてマルクスとはあわなかったロシアの亡命革命家とはちがった流れが、マルクスと接触をはじめようとしていたという事実が、同時に認められる。かれらは、60年代のロシアの運動の経験者で、ゲルツェンではなくチェルヌィシェフスキーにより魅かれていたし、バクーニン派とは対立したのであって、そのため、マルクスとのあいだのわだかまりもすくなかったといつてよい。そして、アレクサンドルがとろうとした方向は、かれの死後、おなじく60年代初めの学生運動、第1次「土地と自由」結社の関係者たるウーチンによって、1870年3月、第1インター・ロシア支部の設立、それとマルクスとの交流という形をとった<sup>27)</sup>。その端初は、ダニエリソンの『資本論』訳の動きと、踵を接していたのである。

こうして、相次いでロシアの内外からもたらされた新しい動きにつづいて、ダニエリソンから送られてきたのが、フレロフスキーの著書であった。マルクスが『資本論』との関係で、ロシアの土地制度に関心をよせていたことは、さきのダニエリソンからの最初の手紙のすぐあと、エンゲルスにあてた手紙などからもうかがえるが<sup>28)</sup>、ダニエリソンはマルクスの依頼をうけたのであろう<sup>29)</sup>、1869年10月12日(旧暦9月30日)付の手紙で、つぎのように書いてきた。

「今日まで、ロシア語文献でも外国語文献でも、未だ、ロシアの農民、工場労働者、手工業者、すなわち、一般的にロシアの労働者階級の運命と経済状態を、正確に、公的でもブルジョワ的でもない観点から解明した労作は、あらわれていませんでした。その原因は、研究者のぶつつかる障害——大部分は公的性格なのですが——の多さでした。

27) И. П. Шпадарук, *Русская секция I интернационала и ее социологические воззрения*, 1970, стр. 38-42.

28) Marx, Engels, *Werke*, Bd. 32. 1965, S. 197. —以下では、たんに *Werke* と省略。

29) この依頼の経路と内容——たとえばマルクスの手紙——は、未詳である。

フレロフスキーなる人がはじめて、それらの障害をどうにか回避し、もっとも微細な点にいたるまで、ロシアの百姓の経済制度と生活を紹介するのに成功しました。約15年かかったかれの研究の成果が、『ロシアにおける労働者階級の状態』です。もちろん、著者は、自分自身の観察のほか、すべての公的資料を利用しました。

この書物が、あなたの古典的著作『資本論』の続きの部分に不可欠な資料を提供することを願って、あなたに送ります。<sup>30)</sup>

ここに、みられるように、フレロフスキーの著書は、直接には、『資本論』の続巻のために送られてきたのであり、それがロシアであたえる衝撃については、未だにも語られていない。また、著者についても、その過去やいきさつも知らされていない。けれども、この文面から、マルクスは本書がそれ以前の類書とはちがう魅力を感じたのであろう、本書を契機に、マルクスのロシア語とのとりくみがはじまるのであり、その反応はすこぶる早い。

すなわち、マルクスは、10月23日付のエンゲルスへの手紙では、本書が500ページに達することを告げながら、「残念ながらロシア語」と記した<sup>31)</sup>。これにたいする返事で、エンゲルスは、フレロフスキーという名前が非スラヴ的であると首をひねりながら、「人は3カ月もロシア語を勉強すれば、本の一冊ぐらい読むことができる」のだが、マルクスにはその時間がないからボルクハイムの手助けによらねばならないだろう、自分も来夏にもう一度ロシア語をやりたい旨、書いている<sup>32)</sup>。この「3カ月」も利いたのであろうか、1カ月あとの11月29日には、クーゲルマンに宛てて、「ロシア語もやらねばなりません。ペテルブルクから、ロシアにおける労働者階級（もちろん農民もふくまれます）の状態についての本が送られてきたためです」<sup>33)</sup>と、フレロフスキーの著書を

30) *Рес. Пуща*, стр. 167-168.

31) *Werke*, Bd. 32, S. 377. ダニエリソンが本書を送ってくれることについては、マルクスは、10月18日のラファエル・宛の手紙でも記している (Vgl. *Ibid.*, S. 636). 期待のあらわれと、みられよう。

32) *Ibid.*, Bd. 32, S. 378.

33) *Ibid.*, S. 637, 岡崎次郎訳「資本論にかんする手紙」(上), 240ページ。

読むためにロシア語を勉強中ということを言明しているのである<sup>34)</sup>。マルクスの以前からの関心もさることながら、フレロフスキーの著書の刺激の強さがしのばれる。

こうして、この頃にはじめられたマルクスのロシア語の勉強にさいして、かが使ったのは、エンゲルスがおなじように使って、欄外に書きこみなどを行っていたゲルツェンの自伝的作品、『牢獄と流刑』であったということである<sup>35)</sup>。前年秋の『資本論』初版の追註において、ゲルツェンへの皮肉を記していた<sup>36)</sup>ことを考えあわせると、このとりあわせには興味をそえられるが、それもエンゲルスの書きこみを利用するためであったかと、解されている。そして、マルクスは、本書に語源等を書き入れながら、「1870年1月9日読了」と記入しているのであって<sup>37)</sup>、フレロフスキーの著作に接してからでも、「3カ月」とかかっている。ダニエリソンの『資本論』のロシア語訳の申し入れ、アレクサンドル・セルノーソロヴィエヴィチの接近、フレロフスキーの著書という三者は、表面的には別々な、しかし、その根ではつながったところのある60年代末の新らしい動きであり、マルクスの関心への即応とエンゲルスの助言もあって、いまや、より深い、直接的なマルクスのロシア研究への道を歩ませることになったと、いえよう。

当然のことながら、マルクスがひきつづいてとりかかったのは、フレロフスキーの著書であった。そして、それとともに、書物の内容が期待以上であったという満足感と讃辭がかたられる。

すなわち、はやくも2月10日には、「フレロフスキーの本のはじめの150ペー

34) これに先立って、すでに10月30日付のマルクス夫人のクーゲルマン宛の手紙で、同様の趣旨のことが記されている (Vgl. *Ibid.*, S. 699.)。

35) В. Николаевский, Русские книги в библиотеках К. Маркса и Ф. Энгельса, *Архив К. Маркса и Ф. Энгельса*, книга 4, стр. 369. マルクス、エンゲルスの所蔵ロシア語文献とその読書過程について、この論文は殊のほか重要である。ことに、マルクスの付した評注を紹介しており、以下、本論文に教えられる、それによるところが多い。なお、マルクス、エンゲルスの本書への書きこみの例は、*Рев. Россия*, стр. 10 の次に、写真でしめされている。

36) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1867, S. 763.

37) В. Николаевский, *там же*.

ジを読んだ」ということばではじまって、その感想をエンゲルスに伝えているが、そのときマルクスは、つぎのようにいう。

「これこそ、ロシアの経済状態について真実をのべた最初の本だ。この人は、かれのいうところの『ロシア的楽観論』にたいする断固たる敵だ。いままでの共産主義的エルドラドーからは、あまり立派な意見を聞いたことがなかったのだが、フレロフスキーは、すべての期待をこえている。こういうものがペテルブルクで印刷されうるということは、じっさい驚異であり、いずれにしても急激な転回の一兆候だ。

『わが国にはプロレタリアは僅かだが、そのかわりに、わが国の労働する階級の大衆は、どんなプロレタリアの運命よりもわるい運命を背負った労働者たちから成っている』

叙述の仕方は全く独創的だ、往々にしてもっとも多くモンテーニュを思いださせる。この男は自身で旅行して観察したということがわかる。地主、資本家、役人にたいする燃えるような憎悪、社会主義的な理屈はなく、土地神秘主義はなく（共同体的所有の形態を支持してはいるが）、虚無主義的極端化はない。……とにかく、これは『労働者階級の状態』にかんする君の著書以後にでたもっとも重要な本だ。』<sup>38)</sup>

ここにみられるように、ほとんど絶讃といってよいことばを、マルクスは書き連ねた。エンゲルスとのあいだには、さらに以後も、本書や著者についての会話が交されてゆくのであるが<sup>39)</sup>、マルクスはほかでも、同様の評価と讃辞を呈している。たとえば、3月5日付のラファルグ宛の手紙でそうであり、3月24日付の「第1インター・ロシア支部委員会」宛の返事がそうである。後者は、さきにもふれたように、この年3月、ウーチンを中心として、ジュネーヴに第1インター・ロシア支部が結成され、それが、マルクスに総評議会での代表になってくれるようにと依頼してきたのにたいし、マルクスの送った返事という

38) *Werke*, Bd. 32, S. 437, 岡崎次郎訳「資本論にかんする手紙」(下), 242ページ。

39) たとえば, *Ibid.*, S. 440, 443, 445.



点でも、すなわち、新しいロシア人グループとの交流の本格化という点でも、注目すべきものであり、「ナロードノエ・ジェーロ」第1号に掲載される。そして、そこで、マルクスは、「われわれはチェルヌィシエフスキーの精神によって育てられ」<sup>40)</sup>と書いてきたかれらにたいし、かれらの依頼に応じるとともに、フレロフスキーの著書にふれ、「これはヨーロッパにとって全くの発見である」とのべて、エンゲルスにたいしてのべたと同様の評価をくりかえした後、「フレロフスキーや諸君の教師チェルヌィシエフスキーのような人々の労作は、ロシアに真の榮譽をあたえるものであり、貴国もまた現世紀の一般的運動に参加しはじめていることを証明している」<sup>41)</sup>ということばで結んだのである。

この最後のことばは、たんなるお世辞ではなかった。むしろ、これこそ、マルクスがフレロフスキーの著作からえたもっとも重要な感想の一つであったと、いいたい。さきのエンゲルス宛の手紙で、すでに、本書の刊行は、「急激な転回の一兆候」であるとのべたマルクスは、その間にさらに、ラファエルに宛てて、「かれの著作を勉強した後では、人は、きわめてすさまじい社会革命が——当然のことながら、現在のモスクワ人の発展水準にふさわしい形態で——ロシアにおいて不可避であり、近くもたらされるということを、固く確信します。これは、よい報せです」<sup>42)</sup>と書いているのであって、マルクスは、フレロフスキーの著書に、ロシアにおける社会革命の接近を、まさに「革命的ロシア」の兆候を認識したのである。この認識が、ロシアにおいて本書のもたらす衝撃や影響と軌を一つにするものであり、それらを予感したものであることは、明らかであろう。そして、その認識によって、ロシアは、『資本論』の続巻のための材料という枠をこえた、直接的な関心の対象となってゆくのである。そうした意味をフレロフスキーの著作はマルクスにたいしてもったのであった<sup>43)</sup>。

40) *Рез. Писем*, стр. 169.

41) *Werke*, Bd. 16, S. 406-7. 邦訳401-402ページ。

42) *Werke*, Bd. 32, S. 656-659.

43) 1871年1月21日のマイヤー宛の手紙のなかでも、マルクスはロシア語に精通したいと思った動機に、フレロフスキーとチェルヌィシエフスキーをあげ、「収穫は……労苦にひきあうものです。いまロシアで起きている精神的運動は、ロシアが深い底のほうで醗酵していることを、しめして

事実、この後、マルクスは、第1インター・ロシア支部とだけでなく、つぎつぎと、新しくおこってくる「革命的ロシア」と関連した動きに、接することになり、また、それらを通して、ロシアへの認識を深めてゆくこととなる。おなじ1870年春、フレロフスキーと相似た経験を持ち、70年代の運動の形成にも、これまた似た役割を担ったラヴローフは、国外に脱れることに成功したが、その脱出は、『資本論』のロシア語訳計画メンバーで、『経済学批判』の訳をやっていたネグレスクル、おなじく訳者の一人ロパーチンらによって、援助されたのであった<sup>44)</sup>。ラヴローフとマルクスの交流は、同年秋の第1インター加入後にはじまるのであるが、ロパーチンは、同年7月から10月にかけて、マルクスを訪れている。ネチャーエフ事件等、ロシアの革命運動の状況が語られ、フレロフスキーについても、はじめてそれが匿名であることなど、正確な情報がもたらされた<sup>45)</sup>。10月には、スレブツォフから『ズナーニエ』誌への寄稿の依頼があり、マルクスとロシアを結ぶ糸は、急速に多様化するとともに緊密になって行った。同時に、はやくも1871年にはいると、マルクスはロシアの共同体的土地所有についての見解をもとめられる<sup>46)</sup>。ロシアにおける革命の可能性と土地制度の関係という問題が、以後、マルクスの重要な問題となってゆくことは、いうまでもない。それゆえ、フレロフスキーの著書はロシアにおいても、マルクスにたいしても、ともに相似た関心をよびおこす役を担ったことになる。

#### IV

しかし、最後に、フレロフスキーの著書にたいするマルクスの全体的評価となると、なお、検討の要がある。マルクスのロシア語の進歩は非常なものであったようで、フレロフスキーの著作の180ページ以降では、方言や特殊な用語

います。頭はいつでも、目に見えない糸で国民の身体につながっているのです」と、書いている(*Ibid.*, Bd. 33, S. 173, 岡崎次郎前掲訳, 248-249ページ)。

44) F. Venturi, *op. cit.*, pp. 451-452. なお、ダニエリソンとかれらとの関係については、A. Resis, *Das Kapital Comes to Russia*, *Slavic Review*, Vol. 29, No. 2, June 1970, pp. 222-223.

45) *Werke*, Bd. 32, S. 520-522.

46) *Рев. Россия*, стр. 186-187. Cf. A. Resis, *op. cit.*, pp. 227-228.

以外はほとんど辞書を必要としなくなったか、訳語の書きこみは全くなされていないということであるが<sup>47)</sup>、記入されている下線と評言は、さきの手紙などにみられる高い評価を裏づけるものばかりではないとされている。マルクスが注目したことをしめす事実関係への評言はともかく、ニコラエフスキーの記しているところによれば、「理論的」な点については、かなり手厳しい、批判的評言が多いということは<sup>48)</sup>、注目さるべきであろう。たとえば、共同体における平等関係の回復、その在るべき姿を説いたかれの主張にたいして、マルクスは、「古い幻想」とか、「これはブルードンが基本的ソース」と書きつけて、ブルードンの観念の影響を、そこに見出した。また、同時に、フレロフスキーのなかに「スラヴ主義的傾向」をも、かれは感知しているのであり、それらは、ともに、マルクスの批判と嘲笑をよびおこしている<sup>49)</sup>。

このことは、もちろん、さきの手紙等でも、全くふれられていないわけではない。マルクスは、フレロフスキーの「ロシア国民の無制限な完成可能性やロシアの形態における共同体的土地所有の原理にたいする無邪気な見損い」<sup>50)</sup>についてかたっている。けれども、フレロフスキーの著書の150ページ以降において、かれの「社会主義的な理屈」と、それにたいするマルクスの評言がみられてくるといことは<sup>51)</sup>、おなじころから、マルクスの当初のような讃辞が、記録にはのこされていないということと、無関係であるとはいえまい。そして、すでに指摘されているように、「かれのナロードニキ主義の最善の、もっとも特徴的な表現は、かれの著書の描写的部分ではなく、最後の章にある」<sup>52)</sup>と

47) В. Николаевский, *там же*, стр. 369. フレロフスキーの著作への書きこみの例は, *Werke*, Bd. 32, S. 440 の次に第4ページの, *Рев. Россия*, стр. 26 の次に第151ページの写真がしめされているが, この両者間でも, 大差が認められる。

48) *Там же*, стр. 375.

49) *Там же*, стр. 375-377.

50) *Werke*, Bd. 32, S. 659.

51) В. Николаевский, *там же*, стр. 375.

52) A. Walicki, *op. cit.*, p. 110, n. 1. フリツキーは、このことばにつづけて、それゆえ、「もしマルクスが1970年2月10日のエンゲルス宛の手紙以前に、最終章を読んでいたら、かれの意見は、多分、ずっと好意的底合が低かったであろう」と論じている。正当な、鋭い指摘であるといえようが、そのさい、かれは、なぜか前述のニコラエフスキー論文には言及していない。

するならば、それにたいする評価こそ、フレロフスキーにたいするマルクスの全般的評価としては、重要となる。マルクスの評言を、その当否をふくめて全体的にあつかうことは、フレロフスキーの著作の内容そのものと、かれの理論の展開と関連させておこなうべきものであるかぎり、別稿のテーマとしなければならないけれども、結論の部分にたいするマルクスの評言が、前半の描写的部分にたいするものに較べて、否定的な、ないしは懐疑的なものであったことは、否定できない事実であるように思われる<sup>53)</sup>。

また、それゆえにこそ、マルクスは、フレロフスキーの著作にたいし、以後、言及、断定をさし控えたとも、考えられよう。それは、たんに、はじめに受けた印象と、それにたいする恥じらいだけではなかった。「ヨーロッパにとっての発見」と感じられた新鮮さや「革命的ロシア」の胎動という問題と、それでいて古くさいブルードンの、スラヴ主義的傾向の含有という事実、この矛盾が、一時、マルクスの断定的判断を控えさせ、複雑な要因をはらむものとして、よりロシアの内実を目を向ける必要性を感じさせたとはいえないであろうか。ある意味で最後まで多義的なマルクスのロシア論は、こうした推論をも誘うのである。

ともあれ、約1年ばかり後、1871年5月23日(旧暦11日)付で、ダニエリソンはマルクスに手紙を送ったさい、「フレロフスキーがいかにして自己の著書のために必要な資料をあつめたかを記したかれの手紙」<sup>54)</sup>を、ともに送った。ダニエリソンが、マルクスの関心と依頼に応じて、フレロフスキーに仲介の労をとった結果であろうが、フレロフスキーの手紙は、長文にわたって、各章ごとに対象や資料の説明と要約をおこなっているものの、実務的な性格のものであって、その他の問題についてはふれていない<sup>55)</sup>。換言すれば、より深い交流や意見交換のあった証はなく、マルクスのこのときのダニエリソンへの返事にも、『資本論』の翻訳問題は語られていても、フレロフスキーへの言及はない。さ

53) В. Николаевский, там же, стр. 377-378.

54) Рев. Россия, стр. 197.

55) Там же, стр. 191-195.

らに、後になっても、ダニエリソンはマルクスに、フレロフスキーの論稿を載せた『ロシアの社会問題』を送り、『ロシアにおける労働者階級の状態』第2版の発禁を伝えているが<sup>56)</sup>、それにたいしても同様である。かつての関心と興奮は、もはやマルクスに見出せないようである。そのかぎり、ロシアにおける70年代のナロードニキ主義にたいするフレロフスキーの関係と同様に、マルクスにたいするフレロフスキーの関係も、当初の衝撃と影響の大きさにもかかわらず、以後、永続的に相交するところはすくなかったということになろうか。ただ、そうした性格をもったとしても、同時にまた、70年代のナロードニキのばあいにもマルクスのばあいにも、当時のロシア社会、すなわち「革命的ロシア」の、内的構造、矛盾を把握する仕方のうちに、フレロフスキーの影は一定の影響をとどめなかったであろうか。このことは、『ロシアにおける労働者階級の状態』の内容を論じるさいに問題となろう。

56) ダニエリソンのマルクス宛、1871年8月1—6日(旧暦7月20—25日)付の手紙(Рев. Россия, стр. 246—247.)